

巻頭言

メディアセンター長
立教大学理学部 教授 枝元 一之

すでにお気づきの方も多と思うが、現メディアセンター長は相当な酒飲みである。アンケートで「趣味・特技」の欄があれば、迷わず「大量の飲酒」と記入するほどである。かつて立教大学に赴任した時、このようにおしゃれな大学では、職員は皆酒ではなくて紅茶でも飲んでいるかと警戒したが、意外にも同好の士が多くて安心した。言うまでもないが、メディアセンターも私にとって相当に居心地の良いところである。

私はあまり強い酒はたしなまず、ビールが熱狂的に好きである。私の場合、ビールはそのもの自身がうまいから飲んでいるのであって、酒ではなく「ビール」という一種特別の飲料と認識しているフシがある。ビールというものは、いつどのような状況で飲んでもうまいのであるが、自分自身の状況を整えることによって、いやが上にも美味しくすることができるという点で格別である。私の休日は、1日をビールを美味しくすることに費やしていると言っても過言ではない。以下では、長年の試行錯誤の末に到達した、ビールを絶叫的に美味しく飲む秘訣について述べさせていただきたい。

休日、今日はビールを美味しく飲むぞと決意したときは（ということは、私にとって全ての休日である）、戦いは早朝から始まる。ビールを真に美味しく飲むためには、早起きすることが肝要である。遅くとも、7時には起きていただきたい。できれば、起き抜けに戸外に出てきりりとした外気のもとで気を引き締め、虚空をにらんで「今日は美味しいビールを飲むぞ」と心の中で叫んでいただきたい。状況によっては実際に叫んでも構わないが、通常の住宅の立地条件では家人隣人に奇異な印象を与えるので避けたほうが良いだろう。特に家人との調和を図るのは、ビールを美味しく飲むうえで重要な秘訣の一つである。朝食は何でも構わないが、後の予定を鑑みるとやや控えめな分量で消化の良いものが望ましい。水分は、この時点では十分取ることである。その後は自由に過ごしてよいが、できれば掃除、洗濯、食器洗い、外回りの掃除等積極的に家事をしておくのが良策である。これは、午後にビールで呑みだくれることでの家人の反感を少しでも和らげるためである。もう一度言うが、家人との調和を図るのは、ビールを美味しく飲むうえでかなり重要な秘訣である。その後、午前中できれば10時ころから、やや息が弾んで十分に汗をかく強度の運動を行う必要がある。運動は、縄跳び、自転車、テニス等、それなりの強度のものならなんでもよいが、私の場合は1時間半から2時間程度走りにしている。これは、体内の水分を十分放出するのに加えて、適度の肉体疲労を得るためである。適度の肉体疲労は、ビールを美味しく飲むための最重要項目と言って良い。実のところ、私は最近心臓に疾患が見つかり、医師からアルコールと運動は固く禁止されている。つまり、私はビールを美味しく飲むことに、文字通り命をかけているのである。

運動後、すぐにビールを飲んでもそれなりに美味しいが、真にうまいビールを飲むためにはもう少し我慢しなければならない。運動直後は身体が活性化されていて疲れが新鮮であり、真にうまいビールを飲むためには疲れを「熟成」させる必要があるためである。とりあえずは、昼食をお取りいただきたい。適度な汁気と塩分があって胃腸に負担の少ない、蕎麦、うどんなどがお勧めである。その後は欠伸でも一発して、昼寝をするのが肝要である。眠たくないなどという者は、当て身を食らわしてでも眠らせる必要がある。この睡眠によって、疲れは体内の奥深く沈んで、まろやかに香り高く熟成されていくからである。

昼寝からさめた段階で、すでに疲れは申し分なく熟成された状態になっている。この時点でビールを飲むと凄まじくうまいのであるが、真に絶叫的にうまいビールを飲むには、さらに我慢する必要がある。うまいビールを飲むには、修道僧のごとき自己規律が要求されるのである。昼寝から覚めた直後は身体が睡眠状態にあり、まずこれを覚醒化する必要がある。交感神経、副交感神経が何やら関与するのであるが、詳しいことは忘れた。また、ビールを真に美味しくするためには、体温を平熱より 0.25 度高めにするのが望ましい。平熱が 36 度 4 分の人なら、36 度 6 分半まで持っていく必要があるのだ。これはビールにおける「2 分半の法則」と呼ばれ、ビールが発祥した古代メソポタミアの文献にもすでに記述が散見される。このため、私は 1 時間程度早足でウォーキングを行うことにしている。これは、体を活性化し、体温を上げるとともに、適度に体内の水分を飛ばすのにも有効である。このウォーキングでもって準備は終了である。ここまですれば、「ビール」と聞いただけで身悶えて喉元をかきむしる状況になることは請け合いである。もしこの時点で私がビールに近づくのを阻止しようとする者が現れれば、私は吞鬼と化してこの者の肉を喰らい、喰い殺すであろう。後は、店で飲むもよし、自宅で飲むもよし、自由にビールをお楽しみいただきたい。最初の一口で旨さのあまり絶叫するであろうが、この絶叫も心の内にとどめて本当に絶叫しないほうが家庭の融和には有効であろう。私は、常々、どんなに手の込んだ料理を出しても、あなたはビールを飲むときのほうが美味しそうな顔をすると言って、家人より責められるのである。よって、ビール道において健脚者コースを超えた超上級スペシャリストコースを目指すには、うまいビールを不味そうに飲む演技力まで要求される。通常、ビールは最初の一口がうまいと言われるが、ここまで入念に準備をした場合は、中ジョッキ 2 杯位までは一口飲むたびに絶叫を抑えるのに苦労するぐらいうまいビールを楽しむことができる。つまりは、少量で口内をリフレッシュできるものが良く、私は最近少量の生ハムに決めている。

さて、ここで強引に AI の方に話を持っていきたい。上記のビールを美味しく飲む作法は、膨大な経験の積み重ねから長い年月をかけて編み出したもので、もっと若い時代にここまで分かっておればと切齒するところである。そもそも、これが最善の方法である保証はない。将来、AI の機械学習により、個人の性癖、嗜好に関する膨大なデータから、その人が美味しくビールを飲むためには何をすればよいかを瞬時に分かる時代がくるかもしれない（そんなことできるもんかと内心思っているが、話の都合上このように書かせていただく）。AI は第二の産業革命とよばれているが、これが単に現在の情報技術の延長線上にあるのか、そ

れともどこかで本質的な変革がもたらされるのかが私などにはわからない。いずれにせよ、AI による特に情報技術の変革の波を大学で最前線にかぶるのが、メディアセンター（あるいはその後継部署）であることは間違いない。今まで以上にモデルのないところで、様々な変革に対し大学としてとるべき道を探るところからメディアセンターが責務を負うことになることになると思われる。昨年度も書いたが、大学としての財政健全化への取り組みの重要性は充分認識しているつもりであるが、メディアセンターの担う業務の重要性と今後避けられない膨大化を考えると、その拡充はどうしても必要かと考えている。